「一掬（いっきく）」作　八木玲子（れいこ）さん

特集 現代美術作家展 ニュー・ロケーション ―陽光―

問 藤樹の里文化芸術会館 ☎（32）2461

藤樹の里文化芸術会館では、県内に居住し、活動する現代美術作家の作品を展示する「現代美術作家展 ニュー・ロケーション ―陽光―」を令和4年3月15日（火）から27日（日）まで開催します。

※9月に開催を予定していましたが、3月に延期となっています。

コロナ禍の自粛生活で自宅など屋内での生活が長くなり、照明や液晶画面などから発せられる人工の光に囲まれることが多くなっています。そこで多様な現代美術作品を通して、自然の光を感じていただけるようテーマを「陽光」としています。

今回は、八木（やぎ）玲子（れいこ）さんの写真や映像によるインスタレーション（空間自体を作品とする手法）、塩賀（しおが）史子（ふみこ）さんの油彩画、度會（わたらい）保浩（やすひろ）さんのガラスを使用した立体造形を展示します。

窓ガラスに差し込む煌めく光、草木の隙間からのぞく木漏れ日、波打つ湖面の照り返しなどが表現された作品が集まります。そこから感じられる温度や湿度、色や音、匂いや感触を意識的に体感すると、さまざまな自然の光があふれる空間を感じられるのではと思います。

ここでは、それぞれの作家の注目していただきたいところを紹介します。

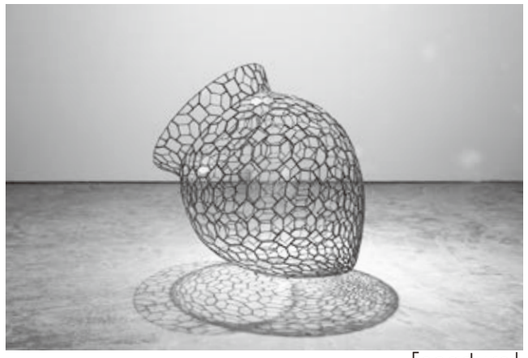
鑑賞のポイント

八木さんの作品は、ピンホールカメラ（針穴写真機）を使い、生の光や時間、自然の移ろいなどを記録しています。今回は、琵琶湖を映した写真や映像をインスタレーション作品として空間を創り、琵琶湖の水面の揺らぎ、反射した光、波の音、湖風などのイメージを通して、鑑賞者の潜在している記憶や意識を掬（すくい）あげます。皆さんの中にある記憶や意識を作品が思い起こさせるかもしれません。

塩賀さんの作品は、キャンバスに油彩で描いています。モチーフの多くは、身近にある立木や草花、小川などいわゆる「その辺の風景」ですが、光や影が作り出す一瞬を捉えた光景がドラマチックに描かれています。写実的ではありますが、写真とは違う油絵具特有の質感が、画面外の奥行きや空気感、温度や光の揺らぎを感じさせる作品となっています。皆さんが普段見ている身近な風景を思い浮かべながら鑑賞すると、また作品を違う視点で見ていただけると思います。

「永遠について」

「彼方の庭―藪椿―」



「eagdure」

「庭」（左）／「庭」（右）

度會さんの作品は、ガラスの立体作品や、凹凸加工を施したガラスでレース模様の影を見せるインスタレーションです。展示する壺型の立体作品は、ガラス片をはんだで繋ぐ、ステンドグラスの技法が用いられています。建物や壁に依存しない独立した「窓」はガラスと光の美しさが引き立たされます。また、鑑賞する時間や天候、鑑賞者の視点によっても様相が変化するので、それぞれの感想を皆さんで共有してみてください。

現代美術は、新しい価値観や物事の違った捉え方を生み出す役割を持っています。作品の背景を読み解き、考え、発見することで、自分自身の記憶や経験につながり、新たな感動に出会うこともあります。

藤樹の里文化芸術会館では、美術作品の展示のほか、音楽や演劇などの文化事業も取り組んでいます。

皆さんのご来館をお待ちしています。